慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フイシヤー原著 河上肇評釈 資本及利子歩合
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	三田学会
Publication year	1912
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.6, No.2 (1912. 4) ,p.366(178)- 378(190)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19120400-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は日本銀行の正貨準備をして自然の伸縮性を失はしめ、又政府の財政策は公債市價の關係より強いて日銀の割引步合を低からしめ、又強いて流動公債を引受けしめ、兌換券の膨脹を來たさしむ。金融寬漫たるに制限外發行絕へざるの奇觀は此くして說明せらる可きなり。而して此狀態を救ふ可き手段として堀江敎授の提說する處は第一に在外正貨の癈棄第二に割引政策の適用なり。我邦は元と世界金融市場の中心を離るゝと遠きを以て割引政策の完全なる奏功は固より豫期す可らずと雖、而かも確かに或程度まで正貨を吸引するの力あるは疑ふ可からずと云ふ。

以上は「中央銀行と金融市場」の一斑を摘記したるに過ぎざるなり。堀江敎授の著作の價値に就ては世既に定評あり敢て贅せず。（三小泉信）

フイシヤー原著
河上肇評釋
資本及利子步合
大判二百五十二頁　定價金一圓
明治四十五年一月　博文館發行

本書は米國エール大學敎授フイシヤー氏（Irving Fisher）の著述に係る

『資本及所得の性質』（The Nature of Capital and Income）と

『利子步合』（The Rate of Interest）

との二書を抄譯し之に隨所に評釋者の註解と批評とを加へたるものなり。

原著者フイシヤー氏は現今世界屈指の理論經濟學者にして、其母校エール大學に在りて少數の專攻生を相手に高等經濟原理を講述しつゝありて猶ほ春秋に富めり。氏は千八百八十八年エール大學高等普通科を主席にて卒業し、次で九十一年六月迄三ヶ年間同校研究科に於て數學を專攻したるが、研究科在學中或る日兼ねてより米國屈指の經濟學者にして且つ世界有數の名敎師なりと聞き居たる同校の經濟學併に政治學の敎授サムナー敎授の講義を傍聽したるに、聞きしに勝るサムナー氏の該博なる學殖と明晰の頭

惱とは學生時代に天才の譽れ高かゝりしフイシヤー氏に非常の刺戟を與へ、氏は衷心より師事するに足る一大敎師を發見したるを喜び、夫れより日々サムナー敎授の講義を傍聽しけるが、軈て研究科の第三年生となり、愈々ドクトル、オブ、フイロソフイの學位に對する論文の問題を選擇するに當り、既にサムナー氏の感化を受け數學よりも經濟學に趣味を多く有するに至り居しを以て、身は數學專攻生なるにも拘はらずサムナー氏管督の下に經濟學に關する論文を提出して博士の學位を受領したり。其論文を題して、『價値及物價に關する數理的研究』（Mathematical Investigations in the Theory of Value and Prices）と云ひ、ゼボンス氏の『經濟理論』併にアウスピッチ、リーベンの『物價論』を立脚地として、價値及び物價に關する破天荒の數理的研究を載す。

氏は研究科卒業後エール大學にて數學の講師となり、數年後助敎授に昇進したるが、其間常に經濟學を研究し、遂に千八百九十六年に至り經濟學助敎授に轉任し、千八百九十九年經濟學敎授に昇任せり。

エール大學にて敎鞭を執るに至りてより、氏は時々刻々『エール・レビユ』、『クオタリ・ジヤーナル・オブ・エコノミクス』、『エコノミク・ジヤナール』等に經濟學に關する論文を寄稿せられたるが、斯學に關する著書としては、千九百六年に『資本及所得の性質』、千九百八年には『利子步合』を發表せられ、千九百十一年に至りて第三の著書『貨幣の購買力』を上梓したり。『資本及所得の性質』にては經濟學の根本概念、殊に『資本』及『所得』の概念を明確に爲し、且つ科學的推理を用ゐて兩者の關係を研究せり。第二の著書『利子步合』はジヨン・レイ及びベンバウエルクの著書を出發點として在來の各種の利率論の論旨を取捨し、各其の長所を綜合し、之に著

者獨創の所得論を加味して、利率論を完成したるものにして、前者と共に推理の正確、解説の明瞭なる點に於て、經濟學著書中他に之に比敵するものを見ず。

『資本及所得の性質』の載する所は、根本概念、資本、資本勘定、總資本、所得、所得勘定、總所得、心的所得、資本と所得との比率、利率の概念、資本の價値、稼高と所得、資本及所得勘定、危險の分子等にして、猶ほ附錄としては數理的説明を卷尾に收めたり。本文及附錄は紙數四百十一頁にして、全篇簡易明快なる英文を用ゐたり。

河上氏の主として譯出せる『利子歩合』の載する所は左の如し。

第一篇　在來の學説の批評　原書の頁數
第一章　未熟の諸説　三
第二章　生産説　一〇
第三章　出費説　二九
第四章　ベンバウエルク説　五三
第二篇　利率法則發見の第一段
第五章　物價高下と利子　七七
第六章　價値の時差　八七
第七章　利率法則發見の第一段（所得を一定不變として）　一一七
第三篇　利率法則發見の第二段と第三段
第八章　第二段（所得を不定のものとして）　一三七
第九章　所得の種類の選擇　一七八
第十章　發明と利率　一九八
第十一章　第三段（所得を不確實として）　二〇七
第四編　結論
第十二章　利子と理論經濟學　二二五
第十三章　理論と實際　二三六
第十四章　歸納的論證（貨幣史）　二五七
第十五章　歸納的論證（經濟史）　二八九

第十六章　『貨幣説』の歸納的辯駁　三一七
第十七章　摘要　三二七
用語の説明　三三七
附錄　三四五
索引　四二九

右の中河上學士の譯出されたるは第二章、第三章、第四章、第五章、第六章、第七章の大部分と、第八章及第十一章の一半にして原書の紙數にて百四十頁程なれば、原書の約三分の一に當るなり。河上氏は之にフィシヤー氏の利率論を解するに必要なる概念の説明を四十頁程『資本及所得の性質』より譯出して加へたり。されば評釋書の載する所は左の如し。

上篇　根本概念
第一章　富
第二章　財産
第三章　効用
第四章　資本及び所得の概念
第五章　資本と所得との關係
第六章　利子歩合と貨幣との關係
中篇　從來の利子説の批評
第七章　生産力説の批評
第八章　出費説の批評
第九章　ベエーム、バウエルクの説の批評
下篇　利子歩合決定の原因
第十章　各個人の價値時差決定の原因
第十一章　市場に於ける利子歩合決定の原因（上）
第十二章　市場に於ける利子歩合決定の原因（中）
第十三章　市場に於ける利子歩合決定の原因（下）

右の中第一章より第五章迄は『資本及所得の性質』に屬し、第六章より第十三章迄は『利子歩合』に屬するものなり。『資本及所得の性質』より譯出せるものは同書に載する根本概念にし

て、フイシヤー氏の『利子歩合』及其他の著述を解釋するに必要なるものなれば、河上氏が勞を厭はずして、之を抄譯して、卷首に載せられたるは其用意頗る周到なりと謂ふべし。されど評釋書に載せたるフ氏の資本論と所得論とは各其要點を摘錄せるものなれば、之を以て一般を推して、氏の『資本及所得の性質』の眞價を問ふ能はざるは言ふを俟ざる也。若し氏の資本論と所得論とを批評せんと欲する者あらば、宜しく『資本及所得の性質』の本文全體を通讀するのみならず、附錄として其の卷尾に載せたる數理的解說をも併せ通讀せざるべからざる也。

又、評釋書の載するフ氏の利率論は其の大要にして、フ氏が其の著書にて重きを置く所の一小部分に過ぎず。評釋書に載する十三章中にて前にも云へる如く、第一章より第五章迄は資本論と所得論にして、第七章より第九章迄は在來の學說の批評にして、利率論の緒言とも見るべきものなれば、フ氏獨特の利率論の譯出は第六章（利子歩合と貨幣との關係）及び第十章より第十三章に至る合計五章に過ぎずして、紙數としては、評釋書全篇二百五十二頁中の百十頁餘にして、其の一半に及ばざる也。

然れども、評釋書は原著の骨子を遺憾なく譯出せるを以て、評釋書を讀めば、原書を見ずとも原著が利率に關して下したる結論と其結論に達せる順序の梗概を知るに難からず。

さはれ、本書は從來の利率を論じたる杜撰の著述と撰を異にせる原著の特色を充分に發揮し居らざるやと思はるゝ點あり。何を以てか原著の特色となすや。原著者は利率を論ぜる在來の經濟學の如く、單に演繹的研究に滿足することなく、自己の主張が科學的根底を有するものなるを證せんが爲めに、八十頁に亘る附錄に於て數理的說明を與ふるのみならず、百頁を費して貨幣史、一般經濟史上の事實を擧げて結論の歸

納的論證を試みたり。演繹的記述に紙を費すと百五十頁にして、數理的說明と歸納的論證の爲めに紙を割くと百八十頁なるを見ても、如何に原著者が自說の正確を期し且つ之を證せんと努めたるかは明かなり。然るに評釋書の收むる所は緒論以外に演繹的記述に止まり原著者が十五年間に材料を收集し幾多の蹉跌の後に漸やく完成したる歸納的論證と數理經濟學派の重鎭としての數理的說明を省略したり。惟ふに我國の讀者は經濟學の數理的說明を歡迎せざるを以て評釋者が之を省略したるは寧ろ至當の所置ならん。されど歸納的論證の少くも一部の譯書は大に原著の特色を發揮すると同時に讀者をして演繹的記述を會得せしむるに便なりしならんに、惜むべし。されば、此評釋書を讀みてフ氏の議論を了解すると能はざるか、若しくは反對の意見を有し之に批評を加へんと欲するものあらば、宜しく原書を繙きて全篇を通讀すべし。猥りにフ氏の演繹的記述のみを讀みて之を批評するは妄評と爲り終る虞あらん。

斯くの如く譯出の分量に於ては多少遺憾の點あれど、此分量の範圍内にて原著の所論を取捨せざるべからずとせば、評釋者の選擇は至極當を得たるものと云はざるを得ざる也。其譯文に至つては元來達筆家にして且つ幾多の洋書の飜譯に經驗を有せらるゝ評釋者の事なれば洋き所に手が屆ける文章にて一讀通誦その譯文たるを覺ゑず。唯一つ心付ける所を云へば、百七十六頁に載せたる『所得流程の時形』の圖解は少しく明瞭を缺く虞あるが如し。四種の異なれる所得流程を表せる四個の弧線を本書に於ける如く同一圖に相交叉して表示するは初學者を誤まらしむる虞なしとせざる也。此四個の弧線は四個の所得流程の大小を比較せるに非ずして其の變化を表示するものなれば、原著に在る如く別々に之を載せるを可とせざるや。又十四頁四行『附値

asking price』と在るは『附値bidding price』の誤植ならんか。

冒頭にも云へる如く、本書は純粋の譯書に非ずして所々に譯者の註解若しくは批評を加へたり。其中註解は簡明にして原著の意味を解釋するに便を與ふるものゝ如し。されど批評は多少首肯し難きものあるが如く見ゆる也。評釋者は原著の所得論を評して曰く(四十七頁)

『先づ所得の概念より批評せんに凡て物財又は財産の用を名けて所得と云ふことは、甚だしく世俗の用語に反し、學問上の術語として自他の了解に便ならず。吾人の賛成するを得ざる所なり。此點に關してタットル氏の批評に曰く

フィシャー氏の『所得』の概念は其の資本の概念と同じく、全然從來の傳説と普通の實際上の用例とを破壞するものなり。『凡て所得は物の用より成る』と云ひ、又は『個々の富は凡て所得を生ずるもの』にて、食卓の上に盛られたる食物も之を食ふ人に向つて一の『所得』を生ずるものなりなど云ふことは、如何にも奇怪のことにて從來の用語を革命するものと謂はざるべからず。

余は全然此のタットル氏の批評に賛成するものなり。』

フィシャー氏は世俗に對して在來の經濟學を繰返して講義せる人に非ずして、經濟學者に對して根本的に斯學の原則を説明せんと努力しつゝある也。されば時としては、否、多くの場合には氏の所論は世俗のみならず一般經濟學者の所信と相容れざる所あるは怪むに足らざる也。此意見の相違こそ資本と所得との二個の概念を説明する爲めに四百餘頁の一大冊を發表するに至りたる動機なれ。

而かもフ氏は出來得る限り習慣に背馳せざる樣努めたるは歴然たることにして。所得の概念に於ても氏の定義は一見一般の習慣と一致せざるが如くなるも實は然らざる也。フ氏は所得を『一定の期間に於ける用の流れ』と定義すると同時に左の所得の種類を擧げたり。

貨幣所得
財貨所得(貨幣を除く)
享樂所得
心的所得

一人の職工が終日勞働するは數十錢の賃銀を得んが爲めなり。數十錢の賃銀を得んと爲すは一升の米と一尾の魚に有り付かんが爲めならずや。一升の米を購ふは之に依りて餓を凌がんと欲するが故ならずや。餓を凌がんと欲するは心的滿足を得んとなすに外ならずや。數十錢の賃銀を得るは是れ貨幣所得にして、一升の米を得るは財貨所得にして、餓を凌ぐは享樂所得にして、心的滿足は是れ卽ち心的所得也。普通一般に經濟學者が論ずる所は貨幣所得と財貨所得也。若しフィシャー氏が其の所論を此二個の所得に限定せしならば。氏は單に從來の經濟學者の糟粕を嘗むるに止まるもの也。之に反して、氏は所得の概念を一般的に爲し、其概念の根據を心的所得に置き貨幣所得と財貨所得とは所得の一般概念中の一部を代表するものに外ならずとせられたるは、經濟學史上稀に見る功績と云はざるべからず。

評釋は又た原著者は資本及び所得の名稱の下に物の體と用とを説明せしのみにて、眞實の資本及び所得の何物たるやは氏の説明によりて之を知ることを得ずと云はるゝも(四十九頁)、四百餘頁の紙面を用ゐてフ氏が闡明に説明せられる資本及所得の性質が讀者の解し得ざる所なりとは想像する能はざる也。遮莫、評釋者が同じ四十九頁に於て自己の説明として述ふる所得の定義なるものゝ中の廣義の定義はフ氏の所得の一般的定義と同樣にして、評釋者の狹義の所得と稱するものは、フ氏の貨幣所得或は財貨所得

と名けたるものに外ならず。又評釋者の資本財と稱するものはフ氏のCapital-wealthと呼ぶものにして、評釋者の本來の資本と稱するものはフ氏のCapital-valueと名くるものなり。評釋者は原著者と大に意見を異にせると思惟さるゝ如くなるも、實は評釋者の所論と原著者の所說とは殆んど一致せるが如し。

又た、評釋者は五十五頁に曰く

『吾人の採る所の概念に從へば、富の流れて之所得と爲るべき譯なれど、フィシャー氏の說明に從へば、前に云ふ如く却て斯かる富の流れは資本たらざるや勿論、所得とも爲り得ざるが如し。』

されど、富の流れを以て所得と看做せるは評釋者のみに非ずして原著者も亦然り。『資本及所得の性質』百十七頁に曰く

The income from any capital is what that capital brings to its owner no matter what may be the form of benefit brought in. If the capital serve to bring in money, the income is "money-income." If it serves to bring in crops or products, as does a selfsupporting farm, the income is of another form.....

右は評釋者の第一問を解答して餘りあるが如し。

評釋者の第二の疑問とする所は左の如し。(五十五頁)

『第二に、氏は最初資本を說明して富の元本と爲しながら後に至りては財產をも資本と爲すものゝ如し。然るに氏の用語に從へば、富と財產とは決して同義に非ず。仍りて吾人の疑問とする所は、氏の所謂資本なるものは、果して富に限らるゝか、將た財產をも含むかと云ふことなり。之を前後の文意より推すに財產をも含むに相違なかるべきが、もし然りとせば、先きに資本を定義して、富の元本と

云へるは、用語不充分なりと謂はざるべからず。』

されどフ氏の富と稱するものは普通我國の經濟學の所謂財貨にして、財產と稱するものは富に對する個人の所有權を云ふなり。而してフ氏が斯かる資本に關する概念は資本財、資本財貨、資本財產、資本價値等なり。資本財とは資本財貨と資本財產との總稱にして、資本價値とは資本財產若しくは資本財產の價値を云ふ。又、フ氏は便宜の爲め資本價値を單に資本と稱せり。故に氏が單に資本と云ふときは資本財貨の價値を指す場合も在るべく、資本財產の價値を意味するときも在るべし。是れは一見矛盾の見解なるが如くなるも然らず。何となれば、資本財貨と資本財產とは、一は物體と云ひ、他は夫れに對する權利を謂ふものなれば、物質の見地よりせば、兩者の間には犯すべからざる區劃在るも價値の方面よりせば、兩者は正に同一物なれば也。(原著第五章及第六章參照)されば、若し讀者が氏の單に資本と稱するものは普通便宜の爲めに資本價値を意味せるものなりと記憶し居らば、最初に資本を以て富の元本となしたるは用語不充分なりと謂ふ必要は非ざるべし。フ氏が單に資本と云ふとき富を指せるか、或は資本價値を意味せるかは前後の文意に依りて明瞭なり

評釋者の第三の疑問と爲す所は、歐洲中世に於ける土地の如く賣買されざりしものは貨幣を以て表示したる價値を有せざるを以て、賣買されざるものは資本價値を有せざる資本財と爲り『從つて資本財たる點に於ては資本なれども、資本價値を有せざる點に有ては資本に非ずと云ふことゝ爲り、聊か用語の一貫を缺くの結果を生ずる也。』と云はるれど、賣買されざるも、價格は常に存在するものなりとはフ氏の明言せる所也(原著十二頁)評釋者の譯出せざりし左の一節を參照せよ。(同上)

But whatever the difficulties and ambiguities in ascertaining a price or prices for any article, the price or prices do actually exist without any ambiguity.

又た、第七章『生産力説の批評』中に評釋者は二個の疑問を提出せられたり。其の中九十七頁九十八頁に載する第一の疑問は百十六頁に釋出せるフ氏の説明に依りて釋然たるべき筈なれば茲に吾人が喋々するの要なし。されど第二の疑問とは何ぞや。評釋者曰く

『第二の疑問は、資本の一種たる貨幣に就いて起るべし。蓋し貨幣そのものは他の資本と異り、それ自身に於いて貨幣價値を有するもの也。例へば一定の土地が二萬圓の價を有するはその土地より生ずる毎年の收益が千圓宛の價を有するが爲めなること、本文に説く所の如くなれども、之と異り、貨幣其ものは二萬圓の貨幣ならば初めより二萬圓にて、其ものが年々千圓宛の利子を生ずるが爲め始めて二萬圓の價を有すと云ふわけに非ず。されば『資本の價値が所得の價値を生むに非ずして、所得の價値が資本の價値を生む也』と云ふフシャー氏の論は、此の貨幣の場合に當て塡らざるなり。故に『生産』と云ふ語を廣義に解し、一定の貨幣を他人に貸付けて其の利子を取る場合をも名けて生産と云はゞ、二萬圓の貨幣より年々千圓宛の利子を生ずるは、その貨幣の生産力なり。而して元金二萬圓と利子千圓との比は卽ち利子歩合なり故に此の場合に於ては、利子歩合は貨幣の生産力に依りて定まると云ふも、さして不都合なき也。』

此評釋者の言は一見動かすべからざる眞理の如くなるも、物體と價値とを混同せるに起因せる點なきや。評釋者は『貨幣そのものは、他の資本と異り、それ自身に於いて貨幣價値を有するもの也。』と云はるゝも、貨幣そのものとは何

を指すや。蓋し貨幣そのものとは金貨か若しくは金貨を代表せるものゝ謂ならん。されど金貨若しくは其の代表物は價値に非ずして物也。其物に吾人は價値なる概念を附加するに過ぎず。二萬圓の貨幣とは約八千匁の純金にして、吾人は便宜上此八千匁の價値を二萬圓と稱する也。二萬圓の價値を有する土地とは一町歩程（例へば）の土地卽ち物體にして、此土地の價値を吾人は便宜上二萬圓と稱する也。八千匁の純金が其物の性質上二萬圓の價値を有するに非ずして、吾人が單に二萬圓なる稱呼を與へたるに過ぎざるは一町歩の土地は其の物の性質上常に二萬圓の價値を有せざるも、一時便宜上二萬圓なる稱呼を與へたると同じき也。されば、二萬圓の價値を有する土地と同額の價値を有する貨幣を比較するに當りて對照すべきものは、一町歩の土地と八千匁の純金にして、一町歩の土地と八千匁の純金の價値とを比較すべからざるは猶ほ八千匁の純金と一町歩の土地の價値とを對照すべからざるに同じ。因是、二萬圓の價値を有する土地を有する土地が毎年千圓の收益在りとせば其歩合は年五分なると、二萬圓の貨幣の收益が毎年千圓なるとき其歩合は年五分なるに同じ。又た、千圓の年收ある土地が二萬圓の價値を有すとせば、千圓の年收ある純金が二萬圓の價値を有するものなりと云ひ得る也。兩者間の相違は單に土地の場合に於ては吾人は物質的單位を用ひ、貨幣の場合には價値單位を用ゐるに在り若し兩者共に物質的單位を用ゆるか、若しくは價値單位を用ゆるならば評釋者の疑問は起らざりしならん。世俗が便宜上上記の如き沒理的比較を敢てするは深く咎むるに足らざれど、科學的研究はかゝる世俗の謬見を超絶せざるべからざる也。

以上は此評釋書に對して有する感想の一班なるが、吾人はフィシャー氏の著述を我經濟學界に紹介せる評釋者の勞を多とせざるべからず。殊に吾人はフ氏最初の紹介者が河上教授なるは

原著書と共に祝せざるを得ざる所也。吾人は上文に於て單に評釋書の項目を擧ぐるに止め、徒らに內容を紹介せざりしは、理論經濟學に志ある讀者は同敎授が評釋の勞を執られたるブ氏の經濟論を等閑に附し去ること非ざるを確信すれば也。唯原著を讀まざる評釋書の購讀者の爲め、聊か蕪言を述べたるのみ。世に有名なる經濟學者は多けれど、科學的研究を爲し居る者は誠に稀なり。ブ氏は此稀なる經濟學者の一人なり。されば吾人は其の著述の評釋書が廣く我經濟學界に用ゐられ、眞實の研究を喚起するの一動機と爲らんことを希望して止まざる也。（高城）

世界商業史

クライブ、デー原著　三上正毅譯述

大判六百六十五頁　定價金貳圓八拾錢
四十五年一月初版　東京隆文堂發行

本書の原著はA History of Commerceと稱し、米國エール大學敎授クラブ・デー氏の著はせる者にして千九百八年紐育市 Longmans, Green, and Co. の發行に係れり。原著者デー氏は歐洲經濟史に精通せる新進の大家にして、現にエール大學本科及び經濟學專攻科に於て歐洲經濟史の講座を擔任しつゝあり。原書は商業學敎科書として著述されたるものにして、載する所は世界各國の商業史なるが、全書を分ちて古代、中世、近世、最近及び北米合衆國の五篇とし、順を追ふて各其時代に於ける重なる諸國の商業の發達を叙述せり。著者の最も苦心せる所は埃及全盛時代より近年に至る迄約三千年間に亘りて數十箇國の商業史をば如何にして彼に偏せず此に私せずして記述せんかに在りしが、著者の錐敲の功空しからず、良く其の目的を達せるは原書を繙くものゝ一齊に感嘆する所也。然かも本書の異彩と看做すべきものは各國の商業的發展を叙述するに當りて單に商品の種類、賣買高等を擧ぐるに止まらず、商業の根柢たる國家經濟發展の徑路を說明せると是れ也。因是、讀者一度び此書を繙かば、世界文明史上の各強國の榮枯盛衰の遠因を窺ふに足るべし。本書は初版發

行後未だ四年の星霜を經ざるに既に第五版を出すに至れりと、以て本書が如何に好評を博しつゝあるかを知るべし。

譯者は多年米國に遊學し曾てエール大學に於て原著者デー敎授の薰陶を受けたるとある經濟學專攻者にして、曩にアダム・スミスの『富國論』とアルサスの『人口論』の抄譯を試み、近くは『獨逸帝國』及び『外遊十二年』等の著書あり。譯書は第五編亞米利加合衆國中の一部を除き原著全卷を追句的に譯出せるものにして、終始一貫忠實なる飜譯を與へ、譯文も亦平易流暢にして、何等の澁滯なし。譯書は又原書に挿める三十有餘の地圖を轉載したれば本文の解釋上一大便宜を與ふるものと云ふべし。原著に接するの機會を有せざる讀者は此譯書に依りて原著を繙くと同樣の利益を享有するを得るならん。吾人は譯者に對し一好著を我讀書界に紹介せるの勞を謝すると同時に其の譯書を公湖に推薦することを躊躇せざるもの也。（高城）

獨逸殖民新論

法學士廣中佐兵衛著

大判二百〇三頁　定價金一圓
明治四十五年一月　東京巖松堂發行

本書は主として法制上より觀たる獨逸帝國と其の殖民地との關係を叙述したるものなり、載する所は殖民法制の發達、殖民地の領土と帝國領土との法律上の關係、殖民地在住人の法律上に於ける地位、殖民地に於ける立法、行政及司法の組織、民法、商法及刑法の梗概にして、獨逸殖民地現勢の一斑、英人所見世界殖民小觀併に歐米殖民地現勢の統計表を附錄として卷尾に收め、猶ほ著者の用ゐたる參考書を緒言の終りに揭げたり。

本書は一般の法制史及殖民制度、殖民政策の研究者に取りて一好參考書たるべし。さはれ本書は題して『獨逸殖民新論』となせど、論ずる所は概して法制の方面のみにして、本國と殖民地との間の政治的、社會的、商工業的、一般經濟的關係に論及する所尠なし。此種の關係の一